

## 第六章 アメリカ宣教師団による中国軍支援背景

### 1. 在中国プロテスタント教会の行動指針

南京のアメリカ宣教師団が布教の為に中国軍を支援し、その一端として、南京事件を創り出したことは第一部ですでに論証した。しかし、南京のアメリカ人宣教師たちは、中国での布教に尽力するプロテスタントの中のごく一部に過ぎない。首都南京で布教しているとはいえ、かれらが在中国プロテスタント教会の代表というわけではない。プロテスタントのごく一部が、南京で中国軍を支援することだけで中国布教に大きな影響を与えることが出来るのであろうか？ 南京という限られた場所での支援の見返りに、中国政府は中国全土でのプロテスタント布教を後援するのだろうか？ 非常に疑問が残る。

そこで、南京のアメリカ宣教師団の行動の動機をより正確に把握するために、彼らの行動の背景となる、中国のプロテスタント教会全体の動きを確認しよう。

#### (1) 全国基督教連盟による「新生活運動」支援決議

在中国プロテスタント教会と中国政府の関係を、非常に端的に示す決議文書があるので、ここで紹介する。1937年5月6日、上海で開催された全国基督教連盟(National Christian Council)の2年に1度の総会において、蔣介石夫人である宋美齡の呼びかけに応える形で、以下の決議がなされた。少々表現が古いが、名訳と思われるので、『東洋文化史上の基督教』(理想社出版部 1941年) P446より、著者の溝口靖夫神戸女子学院大学部教授による訳をそのまま引用させていただく(旧字は現代のものに置き換えた。以後同様)。

「吾人は蔣夫人の全国基督教連盟大会に送れる声明を最大の関心と深甚なる謝意を以て迎ふるを得た。殊にその結語たる『再建に於ける最重要事は国民の精神的更生と、その人格の向上にある。この再建の大部分は断然教会の任務である。故に新生活運動と教会とは共に協力して進むべきものである。』とあるのは感銘に堪へない。(中略) 故に吾人は左の事項を採決する。

(一) 蔣夫人の全国基督教連盟に対する声明は漢文と英文とに於て印刷し、広くこれを頒布すること。

(二) 新生活運動に於ける多くの理想は、基督教徒の予ての理想と同じものであるが故に、基督教徒は個人たると教会の団体たるとを問はず、共に出来得る限り新生活運動に協力を慫慂するものとす」

重要な決議なので、以下原文も付記する。

"We have heard with great interest and sincere appreciation the address of Madame Chiang to the National Christian Council Biennial Meeting, particularly where in the concluding paragraphs it is said; 'The most important factor in reconstruction is the spiritual renewal of the people and the improvement of their character. In a very large measure this part of reconstruction is pre-eminently the work of the church. Then let us do it together, - the New Life Movement and the Church.'

. . .

We therefore recommend:

(a) That Mme. Chiang's message to the N.C.C. to be printed for wide distribution in both Chinese and English, and

(b) That, recognizing in the ideals of the New Life Movement many of the same objectives that Christians have always sought, Christians, whether individuals or church groups, be urged to cooperate in the New Life Movement program as far as possible." (『The China Christian year book 1936-37』 P77)

全国基督教連盟は、1922年にプロテスタントの全会派集合の上で設立された、中国のプロテスタント教会を代表する組織である。よってこの総会での決議は、中国のプロテスタント教会全体の方針である。この決議の重要なところは、末尾の、蔣介石夫人の宋美齡の呼びかけに応え、『新生活運動』なるものに、キリスト教徒（プロテスタント）は、個人・団体を問わず、全面協力する、というものである。

## (2) 新生活運動とは

この『新生活運動』について説明しよう。

新生活運動とは、1934年2月に蔣介石が開始した、近代国家建設のための民衆の教化運動であり、忘れられた中国の伝統的な道徳「礼・義・廉・恥」を基本的な精神として、日常生活を厳格に律することによって達成しようというものである。しかし、新生活運動は単なる生活改善運動ではなかった。それは蔣介石が運動の初期から運動のスローガンとして、生活の三化「軍事化・生産化・芸術化（合理化）」を掲げたことに明らかである。

また、先に触れた『蔣介石と新生活運動』で著者の慶應義塾大学の段瑞聡教授は、蔣介石の新生活運動の目的は、自らの権威を地方に浸透させることであり、また、「蔣介石の政治目的および彼の国家建設理念の具現化」であった、としている。より新生活運動をご理解いただくために、新生活運動に関連する蔣介石自身の発言をいくつかご紹介する。

まず、新生活運動のスローガン、生活の三化の「軍事化」についての説明である。

「軍事化とはすなわち軍隊の組織・軍隊の規律・軍隊の精神・軍隊の行動および生活をもって、政治・経済・教育に普及せしめ、社会全体がそれによって一つの戦闘体になり、最

終的に大衆すなわち軍隊、軍隊すなわち大衆、生活すなわち戦闘、戦闘すなわち生活という目的に達する」(1933年10月2日 南昌行營での演説『蔣介石と新生活運動』P183)

この発言から、軍事動員をも視野に入れたものであることが明らかであろう。

また、次の演説は、運動開始時に南昌でなされた市民大会でのものである。

「われわれ各界の同胞、とりわけ一般青年学生は、私がどんな人かを知っているのか。おそらく皆が私が以前は国民政府主席と革命軍総司令官になったことがあり、現在は委員長であることだけを知っている。・・・人間は生まれつき委員長になるのでもなければ、また生まれつき総司令官になるのでもない。・・・私が以前総司令官で、現在委員長になったのは、少年時代に最も厳格な教育を受け、小さい時から刻苦努力したことによってできたのである。・・・私は各界同胞が私蔣介石が父母と先生から非常に厳しい指導を受けた『整齊』で清潔な人であることを知ってほしい。・・・現在中国でたった私一人の蔣介石がいる。皆さんから始めて、将来何千何万人の蔣介石を育成し、革命指導者になり、国家民族のために力を捧げるのを期待している。最後に一言、つまり皆さん、私を手本として最大の決心と気力をもって新生活を實行し、中国革命を完成させよう」(1934年3月11日 『蔣介石と新生活運動』P144-145)

ここでは、教育・努力により個人が成功でき、そして革命が成就するというを示すとともに、そのロールモデルとして蔣介石を位置づけ、権威付けを進めている。

これらの蔣介石の発言から、新生活運動が、明らかに単なる生活改善運動ではなく、蔣介石への個人崇拜や、軍事動員をも含めた蔣介石の建国政治活動そのものであったことがご理解いただけるであろう。

要するに、先の全国基督教連盟の決議は、中国のプロテスタントの総意として、個人・団体を問わず、蔣介石の建国政治活動に全面的に協力する、という意思表示なのである。この決議のもつ重要さをご理解いただけたことと思う。

ちなみに新生活運動は、日中戦争勃発後に、“予定通り”国民党の「抗戦建国」という戦時体制に組み込まれ、「戦地服務」等の活動をも行うことになる(『蔣介石と新生活運動』P222)。日中戦争勃発後、1938年2月19日ラジオ演説にて蔣介石は、

「国民生活の軍事化、生産化および合理化(もしくは芸術化)を提唱したのは、・・・皆に国家の非常事態に対応させ、非常時に責任を持たせるためであった」(『蔣介石と新生活運動』P218-219)

と、運動開始当初から戦時の対応を想定していたことを明言している。

### (3) 宣教師たちは「新生活運動」の政治色・軍事色を把握していたか？

ところで、在中プロテスタント宣教師たちは新生活運動が軍事動員をも含む蒋介石の建国政治活動そのものである、ということについて気づかずに、新生活運動への協力を決議したのであるか？ 実は、中国で活動していたプロテスタント宣教師たちは明らかに新生活運動の本質を知っていた。例えば、全国基督教連盟（NCC）の幹事、ロナルド・リース氏は、プロテスタントのリーダーたちは、この新生活運動の政治性・軍事性に当然気づき、警戒していたことを記している。

「新生活運動が始まってより、様々な機会に〔プロテスタント〕教会への協力要請がなされてきた。教会のリーダーたちは、公式に運動に参加することや、教会組織の中にその支所をつくることにためらいを示してきた。政府の最高位の人々によって推進されているのでその陰には何らかの政治的意図があるのではないかと、そして軍隊式の統制は危険だと、彼らは感じていた」（『China faces the storm』 Ronald Rees, Edinburgh House Press, 1938, P61）

## 2. プロテスタント教会が政治に踏み込んだ理由

なぜ彼らは、その「新生活運動」の危険性を知りつつも、あえてこの時期（1937年5月）に、協力を決議したのだろうか？

そもそも蒋介石・宋美齡がプロテスタントであり、新生活運動にもキリスト教の影響があることは以前から宣伝されていた。そして、蒋介石・宋美齡の側からプロテスタント教会への新生活運動への協力要請は、設立当初の1934年からあった。そして運動の初期に、アメリカ公理会のG・W・シェファード氏やカナダ合同教会のJ・エンディコットー氏らを新生活運動促進総会の顧問として招聘している。しかし前述の様に、在中国プロテスタント教会の総意としては、当初は、ロナルド・リース氏のいう様な懸念から新生活運動とは距離を置いていた。

しかしながら、あえて、この時期（1937年5月）になって、新生活運動への全面協力、つまり蒋介石の建国政治活動への支援を明確に打ち出したのには理由が当然ある。大きく言えば以下の二点であろう。

- ①この時期によく、蒋介石の権力が国民党内で確立されたこと
- ②蒋介石・宋美齡夫妻は西安事件（1936年12月）のヒーローであり、かつ蒋介石が表明した拘束時の信仰告白（1937年3月）が、キリスト教徒、特にプロテスタントに大いに感動を与え、一種の熱狂が起こったこと

### （1）国民党政府内での蒋介石の権力の確立

まず、最初の点に関して簡単な中国史とともに説明させていただく。現代では蒋介石が孫文の後継者として、孫文亡き後、そのまま国民党を継承したかのような認識が広がっている（本人がそのように宣伝したためもある）が、それは全くの誤解であって、後継者争いには、多くのライバルがおり、紆余曲折を経て、蒋介石はようやく国民政府内で独裁的ともいえる権力を掌握したのである。

近年、この分野での研究が進んでいるので、以下、国民党内での蒋介石の地位の変遷について、蒋介石研究の泰斗、家近亮子敬愛大学教授の研究を参考に、簡単にご紹介する。

そもそも蒋介石は軍人であり、孫文にとって、欠かせない有能な将軍であったが、政治面での後継者としては全く見られていなかった。家近亮子氏は、「孫文の蒋介石評価は、軍人としてのものであり、あくまでも黄埔軍官学校の校長としての扱いに過ぎなかった。蔣は自分に向けられる孫文の眼差しに強い不満をもっていた」（『蒋介石の外交戦略と日中戦争』岩波書店 P47）と蒋介石の不満を紹介している。事実、1925年3月12日に孫文が北京で客死したあと、広東の国民政府を継承したのは汪兆銘であった。

その広東政府の武漢移転後、1927年4月12日に上海で反共産勢力の所謂、「四一二クーデター」が発生し、蒋介石は大いに軍事的に貢献したにも関わらず、1927年4月18日に設立された南京国民政府の主席に就任したのは胡漢民であり、蒋介石は南京国民政府の設立

メンバーにすら入っていなかった。独裁的な傾向をもつ蒋介石は、共産主義者からだけではなく、民主制を進めるリーダーたちから大いに反発を受けていたのである。その後、蒋介石は南京政府と武漢政府の合流の為の障害であるとされたため、同年 8 月国民革命軍総司令の職を辞し下野している。

しかしその後、武漢・南京両政府は南京に合流するも様々な政争があり、結果、蒋介石は 1928 年 1 月 4 日に国民革命軍総司令に正式に復職している。そして同年 8 月には南京国民政府主席に就任するも、その政治的権力は、制度上、集団指導体制である中央政治会議の監督下という限定されたものがあった。そこで 1931 年 3 月、蒋介石は主席への権力集中を図る法案を通そうとしたところ、当時、立法院院長であった胡漢民の猛反対にあった。そこで胡漢民を南京郊外で幽閉し（湯山事件）、新たにの立法院院長を立て、同年 5 月に強引に法案を通した。それに対し、反蒋介石の広東臨時国民政府が立ち上がるなどの猛反発を受け、結局同年 10 月に胡漢民を釈放した。釈放された胡漢民は上海で汪兆銘と会談し、両者で、実務上の責任は国民政府主席ではなく行政院が負うこと（=蒋介石の政治的権力の否定）や、総司令を廃すべきこと（=蒋介石への軍事的権力集中を否定）、等の基本方針を決定した。それに対し蒋介石は、「およそ胡〔漢民〕、汪〔兆銘〕先生の同意したことに對して、私が同意しないことはあり得ず、その通りにするつもりである」（『蒋介石と南京国民政府』家近亮子著 慶應義塾大学出版会 P149）と表明せざるを得ず、その後 1931 年 12 月 15 日、2 度目の下野となるのである。これは政治的には完全敗北であった。

ここで、「汪兆銘」、「胡漢民」についてもう少しご紹介しておこう。彼らは、孫文逝去後の中国史における重要人物である。蒋介石と彼らの分合は、元国民党中央党史委員会主任の蔣永敬氏の『多難興邦：胡漢民、汪精衛〔兆銘〕、蒋介石及國共的分合興衰 1925－1936（新鋭文創）』に詳しいが、ここでは、家近亮子氏が、両氏を蒋介石との関係において、ごく簡潔にまとめているので、それをご紹介させて頂く。

「汪精衛〔兆銘〕は、一八八三年五月四日生まれで、蒋介石より四歳年上、胡漢民は七九年一二月九日生まれで八歳年上であった。また、汪も胡も広東省の知識階級の出身とともに科挙に合格し（汪は秀才、胡は挙人）、日本の法政大学に留学し、関係は極めて密であったといえる。日本での革命活動では中国同盟会の機関誌であった『民報』を編集するなど、国民党内の論客として活躍し、孫文の信頼も篤かった。彼らは蒋介石の軍事力を必要としたが、蔣が個人独裁をおこなうことには強い拒否反応を示し、集団で反蔣運動を起こしていった」（『蒋介石の外交戦略と日中戦争』P52）

汪兆銘、胡漢民との関係を把握することにより、蒋介石の国民党内での立ち位置が一層明確になったかと思う。

さて、一時的に下野しようと、蒋介石が軍事的な実力者であることは変わらなかった。よって軍人としてすぐに復権している。ただ、1932 年 3 月に成立した、所謂「蔣・汪政権」

では、政治は行政院院長の汪兆銘、軍事は軍事委員会委員長の蔣介石という分担制であり、蔣介石の権力はあくまでも軍事面に限るという形での復権であった。

そのような状況の中、1934年2月に蔣介石は南昌で新生活運動を開始したのである。前述の段瑞聡氏は、蔣介石の新生活運動には、「当時国民党内において弱体化した自らの権力を強化し、それを地方に浸透させる目的もあった」と指摘している。また、運動の推進方法として、軍事委員会委員長である蔣介石が、国民党中央と国民政府を超越して、直接に各省・市政府に命令を出したことは、「明らかに越権行為であった」とも指摘されている。

この新生活運動が一定の成功を収め、蔣介石が権力を掌中に収めてゆく一方で、政治上のライバルたち、汪兆銘は1935年12月に持病と狙撃の傷を理由に行政院院長の職を辞し（結果、蔣介石は行政院院長 [=政治上のトップ] の地位をも手にした）、そして、胡漢民は1936年5月に急死するのである。この時期になり、ようやく蔣介石が、国民政府の唯一の最高指導者と認められはじめたのである。現地中国で詳細に中国国内事情を観察している宣教師たちも強くそのように感じたことであろう。また、もう一つの政治勢力である毛沢東らの共産党は反宗教であり、そもそもプロテスタントとは相容れない。プロテスタントとして、仮に、中国の政治勢力で支援するならば、蔣介石の一択となったことであろう。これが、1937年5月の先の「新生活運動」支援決議に繋がった一因と思われる。ちなみに、その後の1938年の3月には、蔣介石は国民党総裁の地位に就任し、さらにその地位を固めている。

## （2）西安事件後の蔣介石の信仰告白

もう一つ見逃せないのは、西安事件(1936年12月)の影響である。読者は意外に思われるかもしれない。現代では西安事件をきっかけに第二次国共合作が開始され、対日圧力が強まった面のみが広く知られている。しかし拘束から無事生還した蔣介石、そして拘束先に自ら乗り込んで、夫の蔣介石を無事救出した宋美齡はヒーローであり、また蔣介石が、監禁時の苦難の中、キリストの愛を再確認したという信仰告白は、キリスト教徒、特にプロテスタント（蔣介石・宋美齡ともにプロテスタント）に大きな感動を与えた。これは、キリスト教世界にとって大変なニュースであった。溝口靖夫氏は、「かかる言葉 [=信仰告白] は支那の基督教徒のみならず、欧米の基督教徒に対する親善の表明に資する処大なるものであった」と分析されている。

1937年3月26日、聖金曜日（復活祭前の金曜日）に、南京にて開催された、メソジスト・エピスコパル教会の東アジア中央会議に蔣介石が送った手紙の冒頭部分を、先ほどと同様に、溝口靖夫氏の訳で引用させていただく。

「宗教的信念なくんば人生を理解することは出来ぬ。・・予は今日まで約十年間基督教信徒としての信仰を持し、その間常に聖書を離したことがない。予が二週間の西安幽閉生活に於て、この時程聖書が予に感動を与へしことを知らない。この不祥事は全く突如として

行われたので、予はこの監禁生活に於て、殆ど無一物であった。予がこの時監禁者に乞ひしものは一巻の聖書に他ならなかった。孤独の生活は読書と冥想とに充分の機会を与へたのである。而も、この時予の心に新たなる靈感を与へたものはキリストの偉大さであり愛であった。・・・」（『東洋文化史上の基督教』P447）

これに対し、前述の全国基督教連盟（NCC）の幹事ロナルド・リース氏は以下の様に、真のキリスト者として蒋介石を絶賛している。

「〔蒋介石〕総司令官の個人的な信仰と経験は10年の間成長を続けた。・・・西安での囚われの間、彼が記した日記と1937年の聖金曜日にメソジストのエピスコパル会議に送ったメッセージは〔以下を〕明らかにしている。彼は、苦しい時に祈りをささげた革命の英雄、孫文の感化を認めている。しかし、彼は、〔復讐という〕悪への誘惑にさらされ、そして彼の敵たちを許したように、今や彼自身がイエス・キリストの、より偉大な感化力を証明している」（『China Faces The Storm』P48）

※蒋介石が、メソジスト教会の江長川牧師より洗礼を受けたのは、1930年であるが、1927年のプロテスタントの宋美齡との結婚に際して、洗礼を受けるという宋美齡の両親との約束があった。そのため1937年の時点において、蒋介石の信仰の期間を10年としている。

蒋介石が西安事件に際して、改めて信仰に目覚めたのかどうかは分からない。ただ、上記の手紙を、復活祭前の金曜日という節目のプロテスタントの会合にあえて送付し、自らを真のキリスト者として、（さらには孫文の正統後継者として）宣伝したのは政治家蒋介石として面目躍如といったところであろう。（当然、背後には、アメリカで教育を受けたプロテスタントであり、彼らの心理を知り尽くした、宋美齡の指導があったことは想像に難くない）。

一応、申し添えておくと、蒋介石はこの西安事件後に突如としてプロテスタントから注目されたわけではない。先にご紹介したミルズ宣教師は以下の様に、既に1931年に、蒋介石のキリスト教への理解、また受洗について、非常に高く評価していることを記している。

「興味深いことに、この〔信教の自由は国民党の方針の基本原則であり続けるべきだという意見が政府内部で有力な考えだと、ミルズ氏に伝えられたことの〕関連で、蒋介石主席が1929年10月のYMCAの全国大会に寄せたメッセージが“信教の自由”であったことが思い起こされる。この言葉以上に重要な言葉は選べない。・・・国民党の宗教に対する態度は今、第三の段階に入った。弾圧や不寛容は減った。これは疑いなく、蒋介石主席自身がキリスト教を祝福するという大胆な行動によるところが大きい。この行動により蔣

介石主席は“信教の自由”という言葉が彼の発言通りを意味することを示し、そして信仰の自由に代表される国民党宣言〔1923年〕が真実に原則を宣言したものであることを示した。蒋介石主席の改宗〔1930年〕が、多分ほかの何よりも明確に、1926年以来辿ってきた長い道のり〔=1925年の孫文死後のキリスト教に対する弾圧とその終了〕を示している」（『The China Christian year book 1931』P81）

よって、西安事件後の信仰告白は、蒋介石への熱狂への最後の一押しとなったことであろう。これらの要素が組み合わさり、プロテスタント教会のリーダーたちは、「新生活運動」の政治的・軍事的な要素を十分認識しながらも、在中国プロテスタント教会の総意として、全面的な新生活運動への支援方針、つまり蒋介石の建国政治活動への全面的な支援方針を打ち出したのであった。

### 3. 全国基督教連盟の蔣介石支援決議が与えた影響と南京アメリカ宣教師団の行動を繋ぐカギ—蔣介石の腹心「黄仁霖」

さて、在中国プロテスタント教会と蔣介石との協力関係を理解したうえで、南京のアメリカ宣教師団の行動を再度検討してみたい。南京でミルズ氏宣教師、中国軍を支援保護しようと発言したこと（第一部 第二章 3.（2）参照）は、全国基督教連盟の新生活運動への全面協力決議、つまり蔣介石支援決議の延長にあることを概ねご理解いただけたことと思う。

ここで、より両者の関係をより明確にするために、先に中国基督教年鑑（China Christian Yearbook 1936-37）で全文をご紹介した、全国基督教連盟の新生活運動への全面協力決議についての、全国基督教連盟幹事ロナルド・リース氏による記録をご紹介しよう。

“The deep religious note in Madame Chiang's appeal made a great impression. ... "Then let us do it together, the New Life Movement and Church." The National Christian Council responded by recommending that Christians, whether individuals or church groups, be urged to co-operate in the programme of the movement as far as possible, and practical ways and means will be worked out by both sides to give effect to the recommendation.

An added source of confidence in New Life Movement was the fact that Colonel J. L. Huang had recently been appointed as general secretary...”

リース氏も当然の事ながら、宋美齡の呼びかけに応じて、全国基督教連盟の新生活運動への全面協力決議がなされたことを書き残している。そして、実際の方法や手段はこの要請を実行あるような形で打ち出されるとされている。

さらにここで注目したいのは、「黄仁霖大佐」が、最近（※）、〔新生活運動の〕総幹事に任命されたとの記載があることである。

※正確には黄仁霖氏は、1937年2月、蔣介石より、「新生活運動」を取り仕切る新生活運動促進総会の総幹事に任命されている（『蔣介石と新生活運動』P107）。

この黄仁霖大佐は、先にご紹介した、アメリカ宣教師団による南京安全区での中国軍支援保護意向をミルズ宣教師が伝えた相手、（第一部 第三章 3.（1）参照）である。つまり、南京においてミルズ氏は、アメリカ宣教師団（プロテスタント）として、新生活運動の責任者である黄仁霖氏に、中国軍の支援保護を申し出たのである。新生活運動は、日中戦争勃発後に抗戦建国体制下に組み込まれ、戦地服務（=中国軍のサポート）をも任務としたことは前述したとおりである。このミルズ氏の申し出は、全国基督教連盟が決議したプロテスタントによる新生活運動への協力を実際に具現化したものに過ぎないことが分かるであろう。

南京に於いての問題は、プロテスタントである南京のアメリカ宣教師団が、カトリックのジャキノ神父に倣い、難民保護を掲げ中立を宣言しながら、実際は中国軍を支援保護したことに尽きる。

中立と一方への支援は両立できない。蔣介石の建国政治活動への全面的な協力を決議し

ているプロテスタント宣教師たちが、中立的な組織を立ち上げるなど、そもそも不可能なことであった。この欺瞞を覆い隠すためにも、絶対悪としての南京での日本軍の残虐行為、つまり「南京事件」が必要とされたのである。

#### 4. 的中したベイツ宣教師の懸念

ちなみに、南京事件の創作過程において広報担当として大活躍するベイツ氏は、先の全国基督教連盟（NCC）による蔣介石支援決議がなされる前、1937年5月6日付の月次の中国情勢報告『National Affairs series from China Missions Newsletter (\*Yale)』で、以下の様に蔣介石への傾倒を戒めている。

「孔祥熙〔妻は宋靄齡。よって蔣介石の義理の兄にあたる。プロテスタント〕の欧州歴訪、王正廷〔元中華キリスト教青年会全国協会総幹事〕の駐米大使としての出発、そしてキリスト教世界に広く宣伝された蔣介石による復活祭のメッセージに対しては、それに先だつ孔祥熙によるオックスフォードグループ〔アメリカ発祥のプロテスタントの活動の一つ〕の会合への電報やそのような彼らのコミュニケーションと同様に、理性的に慎重にならなくてはならない。彼らのような人々がキリスト教徒の立場をとることが喜びであるのは自然なことである。そして筆者〔=ベイツ〕も個人的には、彼らの誠実さを疑ってはいない。しかしながら、現在の政府の一团への宣教師たちの熱狂は、欧米人一般の間に湧きあがった反響と期待と同様に危険がある。そもそも、キリスト教は、原則の上でも実際でも、どの程度あれ、決して特定の政治党派に結びついてはならない。第二に、無警戒でよく知らされていない人々はこの政府の行動や政策全体、または特定の個々人に対し、完全なる賛同を与えるように思う。実際、以前に比べての、中国人の生活の改善には希望を与えられる。しかし、それはほんの小さな始まりにすぎない。縁故主義や腐敗、極秘の検証されない農民の金の莫大な使い込み、危険な検閲と政治的司法によって守られている偏狭な官僚主義、上海の出資者に高い収益をもたらすように管理されている線路と郊外の再開発。これらの悪への責任は高々と積み上がっている。人間の性として、人は好い動機に感動しうるし、真実の奉仕を国民に対し提供しうるが、しかし、利益と不正行為の膨大な留保条件も保持している。我々は、新たな人間・新たな手法の、選択的でそして建設的な鑑定眼のある支援を必要としている。特定党派への熱狂による盲目では無く。馮玉祥の件は、完全な類例とはならないが、今日への教訓である」

“中国人の生活の改善”、“新たな人間・新たな手法”といったキーワードから、これが新生活運動への支援を指していることは明らかである。そしてベイツ氏は、蔣介石の復活祭〔正確には2日前の聖金曜日〕へのメッセージ等の、中国側のキリスト教社会への一連の働きかけが熱狂を巻き起こし、結果的に、政治と距離をおくという教会側の原則を無視して、国民党や蔣介石などへの盲目的な全面支援となることを懸念している。特にクリスチャン・

ジェネラルと呼ばれた馮玉祥（※）個人の名を挙げ、教訓としていることが、蒋介石個人への盲目的な支援となることへの、ベイツ氏の強い懸念を感じさせる。

※馮玉祥：1882年安徽省生まれ。1917年受洗。“以教治軍”を掲げ、クリスチャン・ジェネラルと呼ばれる。西北軍の重鎮。1924年にクーデター（北京政変）で、直隸派が掌握する北京政府に反旗を翻す。1926年国民党参加後は軍政部長等を務めるも、蒋介石との争い（蔣馮戦争 1929-1930）に敗れ、下野。度々ソ連・共産勢力とも手を結ぶ。1948年没。一周忌には毛沢東が哀悼の詩を詠むなど共産党から評価されている。

これは1937年5月6日と記載があるので、宋美齡の誘いに応じて、全国基督教連盟が上海で蒋介石の新生活運動への全面支援を決議する正に同日書かれたものである。ベイツ氏は、全国基督教連盟が総会の開催と共に纏めていた膨大な年次（又は2年次）レポート『中国キリスト教年鑑（The China Christian year book）』に度々寄稿していた（ベイツ氏は1931年号、1932-33年号、1938-39年号に寄稿。ちなみにミルズ氏は1931年号、1936-37年号に寄稿し、1928年号では編集委員を担っている）。全国基督教連盟の活動に深く関わっていたため、事前に宋美齡からの働きかけの情報があつたのであろう。

結局、ベイツ氏の懸念は、全国基督教連盟（NCC）が、プロテスタントの総意として新生余が今日まで活運動への全面支援、つまり、蒋介石への全面支援を打ち出したことで現実になった。そして南京においてはさらに、ミルズ氏のリーダーシップの下、カトリックに倣い市民保護の為の中立・非軍事地域の創設を宣言しながら、実際はその中立地域において中国軍を支援するという詐欺的行為を実行することになった。その過程において南京事件を創作したことは縷々説明した通りである。

この一連の経緯を、全国基督教連盟による蒋介石支援決議がなされる前から冷静に見ていたベイツ氏は、自らいかに危険なことを実行しているか、よく理解していた。だからこそ冷静な状況判断の上で、この宣教師団による、蒋介石・中国軍への支援が表に出ないように極力隠すことに様々な面で注力し、大きな成功を収めることができた。しかしながら、これまで露見しなかったとはいえ、彼らは明らかな嘘をつき、聖書に背いたという事実は消えない。彼ら宣教師たちは中立を装いつつ蒋介石を支援するという明らかな詐欺行為を行ったが、聖書ではもちろん嘘を奨励していない。

「偽りを言うくちびるは主に憎まれ、真実を行う者は彼に喜ばれる」（箴言第12章22節）

聖書に忠実であることを説くプロテスタント宣教師が、布教のために聖書の言葉に背く、という皮肉な結果となったのである。

